

<b>Title</b>	青年の社会的危機意識に関する構造の比較研究：アイルランド人・日本人大学生の価値観を探る
<b>Author(s)</b>	丸山, 久美子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 13(2): 175-186
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=497">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=497</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 青年の社会的危機意識に関する構造の比較研究

——アイルランド人・日本人大学生の価値観を探る——

丸 山 久美子

A Comparative Study of the Structure of Social Unrest in Irish and  
Japanese University Students

Kumiko MARUYAMA

This paper presents a comparison of attitudes toward social unrest, religion and common life among Irish and Japanese university students. The method employed is that of the questionnaire. Under the heading of social unrest, the key words of the problems of the 21st century are 'nuclear power plants' in Japan and 'isolation in human relationships' in Ireland. These problems are discussed from a social-psychological point of view.

## はじめに

ホスピスの歴史を辿ると、アイルランドに行き当たる。19世紀後半、ダブリンにおいて初めてホスピスの道を開いたメアリー・アイケンヘッド (Mother Mary Aikenhead) の功績はオーストラリア、イギリス、アメリカと現在に至るまで脈々と続いている。<sup>(注)</sup> アイルランドの面積は北海道を少し膨らませたような島で人口は東京の5分の1である。しかも、ベルファストを首都とする北アイルランドと分断され、北アイルランドはUK (United Kingdom) の1州である。UKは他にイギリス、ヴェールス、スコットランドの3州を加えて成り立っている。従って、UKを知るには4州の全てを調査する必要がある。アングロ・サクソン民族はアングロ・ノルマン、アングロ・アイリッシュ等の多民族を有し、一口ではこの民族の特徴を知ることが出来ない。米国ではWAPS (白人、アングロ・サクソン、プロテスタント社会) の権力支配が大勢であると言われる。この場合のアングロ・サクソンはイギリスから新天地を目指してアメリカ大陸に渡った一握りのピューリタンであり、彼らがアメリカを掌握していると考えられる傾向がある。欧州各国はそれぞれ、ゲルマン系、ラテン系、アングロ・サクソン系民族の集まりであると考えたこの分類は殆どキリスト教旧教、新教に分か

**Key words;** Anglo-Irish, The Celts, IRA, Nuclear Power Production, Isolation in Human Relationships

れている事が分かる。ローマン・カトリックはラテン民族（フランス、イタリア、スペイン等の南方国）、エバングリシユ・プロテスタントはゲルマン民族（ドイツ、スイス、スウェーデン等の北方国）であり、アングロ・サクソン民族もゲルマン民族の一部をなし宗教はプロテスタントで、アングリカン（英国国教）の流れを汲むキリスト教新教が大勢をしめる（USAを除く）。つまり、西欧諸国は両端にゲルマン民族とラテン民族に分離され、その中間に位置づけられたアングロ・サクソン民族は民族の形態で分類するよりもむしろ宗教によって分類する方が理解しやすい。するとアングロ・サクソンは民族の形態からすれば、ゲルマン民族であると言える。とすれば、ダブリンを首都とするアイルランド共和国はラテン民族に限りなく近く、北アイルランドはゲルマン民族の歴史を踏襲していると言えなくもない。ほんの一握りの北アイルランドに居住するアイルランド人が祖先がキリスト教新教を信仰したがために、同じ島に居住しながら北と南に分断され敵対関係にあるという驚くべき現実と同じ島国に居住する日本人の想像を遥かに超えた苛酷な運命を所有していると考えられる。このように2種類の民族がキリスト教でありながら新教と旧教の故に敢然と識別されている西欧諸国には、キリスト教新教と旧教の対立が常に存在しており、現在でもその典型的な闘争の火種がアイルランドの地に根付いている。アイルランドのナショナルティは何処にあるのかについて我々はほとんど関知しない。民族としてのアイデンティティは未確定で、宗教事情によって、教育、社会環境、結婚相手、職業などがままたず、人々の居住地域すら異なる。これは、現在、中東紛争の渦中にあるパレスチナとユダヤの紛争の状況と酷似している事が分かる。全アイルランドは同じ小さな島に居住しながら、民族が異なり（ケルト、アングロ・アイリシュ）、宗教が異なり（キリスト教新教、旧教）、分断国家（南：アイルランド共和国、北：英国）で、北アイルランドは土着のカトリック系市民と英国本土からの入植者子孫のプロテスタント系市民で国家体制を敷き、英国本土からも地理的に分断されているので、社会的に統一された基盤がなく、社会構成員の多数派と少数派の力関係がものを言い、合意ではなく、多数派による独裁、強制による統治国家である。つまり、アイルランドはアングロ・アイリシュ的なもの（アイルランド化した英国文化）とそれに拮抗するゲーリック（ケルト的）な民族主義的なものの確執化された地域に分断されている。アイルランドの歴史はこの二つの民族の相克の歴史である。1801年にアイルランドは英国に合併され、1916年に英国からの独立宣言以降、ゲーリック的なものの回復が熱望された。民族の魂は言語にあるのだから、ゲーリック語を国語とすることが望ましい。宗教はケルトの土着信仰とキリスト教旧教が結びついたケルト・カトリックである。アイルランドにカトリック・キリスト教を布教したセント・パトリックはキリスト教の三位一体を奉じるカトリックの樹立が基盤となる民族主義的路線の信仰を持つ事でアイルランドが統一されるべきであると夢想した。しかし、ゲーリック的なものとはアングロ・サクソンの目からみれば規律なく、乱脈で、荒れ狂う者、つまり、不潔で、怠け者で、節約心がなく浪費癖、信頼おけず、無知で野蛮なカトリックのイメージが重なっていた。逆に、アングロ・アイリシュ気質は規律を良く守り、一定の限界内で服従した。しかもプロ

テスタントは文明のシンボルであって、カトリックに対する優越感をもっていた。アイルランドのプロテスタントは社会背景、教育、家系の繋がりなどで、アイルランドを英国の一部であると感じ、他方、カトリックのシン・フェイン党は、英国とは別の人種、別の文化、別の言語の立場からアイルランドを考えようとした。不幸なことであるが、現在においても、この二つの主義主張は融合する事なく何らの妥協もないままに、IRA (Irish Republican Army) は未だに武装放棄せず、紛争は続く。ユニオニスト、ロイヤリスト (英国忠誠派)、プロテスタント対共和主義、ナショナリスト、カトリックの対決である。だが、ダブリンのトリニティ・カレッジはアングロ・アイリッシュの牙城であり、プロテスタントの支配階級を育成したが、現在はダブリンのプロテスタントはダブリン大学に進学せず、英国の大学かまたは北アイルランドのクイーンズ大学へ進学する。トリニティ・カレッジでは、カトリックの市民で構成されるダブリンにおいて、苦肉の策のように思えるエキュメニカル (新教、旧教の統一路線) を実行している。

このような国情の中に生活している青年達の社会的危機意識を日本の青年達のそれと比較しながら 21 世紀の社会の動向を予測してみたい。

### アイルランドと日本人大学生の価値観と社会的危機感の構造

「独立国であるアイルランド共和国の国土は日本の約 5 分の 1 で、人口は約 350 万人。ケルト系アイルランド人がほとんどで、カトリック教徒が 95%、プロテスタントは 5% にすぎない。首都ダブリンで、人口は約 57 万人、アイルランドの古い名前「エリン」が「緑の島」を意味するように緑なす美しい島国である」。この能書きは 1985 年の状況で、現在では南アフリカからの難民を入れると 370 万人がアイルランド共和国の人口分布であると言われる。英国の一部である北アイルランドの領土は、アイルランド全島の約 6 分の 1 で、英国本土最大の州、ヨークシャーとほぼ同じである。アイルランド全島では、人口の四分の三がカトリック、四分の一がプロテスタントである。そこに居住するケルト系住民とアングロ・アイリッシュ系住民の文化や生活習慣の相違がその共存を阻み、北と南に分かれて、今でも紛争の種はつきない。

アイルランド共和国軍 (IRA) は北アイルランドに居住するカトリック系住民による武装集団で、1998 年に北と南は和平に合意したが、IRA は未だに武装を解除してはいない。英国は 2000 年をめぐりに IRA に対して武装解除を要請したが、それは拒否され、いつ紛争が起こっても不思議ではない状況が展開されている。中東和平に苦心するアメリカと同じようにイギリスも、この問題に絶えず神経質になっているが、古い歴史を有する文化と生活習慣の違いを併合するには生半可な介入は反って問題をこじらせてしまう危険性がある。

20 世紀末の世界は混沌として、来るべき 21 世紀に対して不確かなイメージが持たれている。新世紀の節目である 20 世紀最後の年から 21 世紀を迎える 2001 年を間近にひかえて、新世紀を担う

青年達の意識、価値観は何の様な様相を示しているのだろうか。なるほど、新たな胎動を予感させる社会現象が多様な先端医療、技術革新、宇宙開発の分野でめざましい発展を遂げているが、それ自体も新たな社会不安の材料にもなっている。クローン人間、遺伝子工学、臓器移植にかかわる不安材料、原子力発電所の故障による放射能漏れとその対応の方法等枚挙に暇がないほどである。

本研究の目的は世紀の狭間にあつて日本人青年とアイルランド人青年達に現在社会問題となっている諸問題、例えば、環境汚染、エイズ、テロリズム、麻薬、組織犯罪、原子力発電などの問題をあげ、青年達が持っている未来に対する不安感情や混沌とした社会の中での生き方や価値観などを調査し、日本とアイルランド（いずれも島国）の間に何の様な特徴があるのかを考察する。

調査方法：100項目からなる質問表を日本人の大学生とアイルランド人の大学生に提示し回収する。回収方法は心理学、社会学、経済学などの人文、社会科学を専攻する学生達に授業中に渡し、15分以内に回答したものを回収する。両国の大学生の平均年齢はアイルランドの大学生、20.7才、日本の大学生は20.3才であった。

調査対象者：アイルランド共和国の首都ダブリンにはアイルランド国立大学ダブリン校（University College Dublin : UCD）と16世紀にエリザベス1世が英国のケンブリッジのトリニティ・カレッジと同じ信条を持つカレッジを創設した際の古いカレッジであるダブリン大学がある。UCDはカトリック校でダブリン大学は英国国教会（アングリカン）を信条とするプロテスタント校である。従って、ダブリンではカトリックの学生はUCDに、プロテスタントはダブリン大学へ進学すると考えられる。以下に述べるのはアイルランドの大学（カトリック：UCD、プロテスタント：ダブリン大学）の学生（男子：86、女子：87、合計：173名）と日本人大学生（男子：203、女子：171、合計：374名）の宗教的態度と社会が混乱したときの自分の生き方の道筋を調査した結果である。なお、日本人大学生はキリスト教の教育理念を持つ大学のカトリック系とプロテスタント系（カトリック：上智大学、プロテスタント：青山学院大学、聖学院大学）の学生たちを対象にしている。

質問表の構成：以下の5側面より構成された100項目からなる質問表である。1：宗教的態度、宗教行動に関わる問題、2：死生観、自殺に関する諸問題、3：混沌とした社会の中での個人の生き方志向、4：社会的危機問題、5：政治的態度。

調査実施日時：1999年11月～2000年2月

## 結果と考察

### A：宗教的態度の分布

表1はアイルランド人大学生と日本人大学生のそれぞれに信仰する宗教を示している。予想通り、日本人大学生は、大方の日本人と同様に特定の宗教を持たない。76.2%がいかなる宗教も信じていないと回答している。日本人は特定の宗教を持たず、国教は仏教であるが、習慣として神仏混交で、

仏教と神道が入り交じり、家のなかには先祖を祭る仏壇と古代宗教を象徴する神棚が並んでいることが知られている。元旦、七五三のお祝い、お宮参り、結婚式は神社に詣で、法事、葬式のときは寺院で行うという区分けが暗黙のうちに形成されている。ただし、この研究の対象者は建学の精神がキリスト教教育理念にもとづいているので、日本人全体からすれば、キリスト教新教、旧教の比率が多い。カトリックとプロテスタントを合わせると10.2%である。新興宗教（オウム真理教、統一教会、真光教、等）の蔓延が取り沙汰されている現在では、1980年代に比較して、日本人の青年はその他の少数派の宗教を恐れるようになってきていることがわかる。それに対して、アイルランド人の宗教はアイルランド共和国ではカトリックのキリスト教が国民の95%を占めている。しかし、学生は多様で64.2%がカトリックであり、プロテスタントは高々8.1%にすぎない。その他の宗教（ユダヤ、イスラムなど）が16.8%であるのは、今日のアイルランドの状況を表しているものと思われる。また、どの宗教も信じていないという大学生の回答率が8.1%と高い比率を示しているのもアイルランドの今日的状況ではあるまいか。青年達が宗教離れしている現状は世界的傾向であると思われる。

表1 特定の宗教

	アイルランド人	日 本 人
1：仏教	0	9.6
2：プロテスタントキリスト教	8.1	5.5
3：カトリックキリスト教	64.2	4.7
4：神道	0	1.0
5：その他の宗教	16.8	1.3
6：どの宗教も信じてない	8.1	76.2
7：DK	2.9	1.8

## B：混乱した社会の中での生き方志向

表2、3はアイルランドと日本の学生達の「もし、世界が戦争や混沌の中に滅亡するとしたら、あなたは何をしますか」、(What would you do if it was clear the world would perish in the confusion of the world war?)という混沌とした社会の中での生き方を選択させた場合の回答結果である。この結果は彼らの宗教的態度と関係が深い。両国の生き方の順位相関は $-0.548$ である。日本の青年に「成り行き志向」が高い尺度値で安定しているのは（表3の変異係数が低い）仏教的信条の現れであるし、ヘドニズムや革命志向を選択するアイルランドの青年達の回答はキリスト教カトリシズムの現れではないだろうか。又、図1はこれら5通りの生き方を2次元空間に位置づけたものである。日本の青年は困ったときの神頼みで神社仏閣に御守りを貰いに行く習慣を持っているにもかかわらず、それが宗教的行為であるとは思っていない。おそらく成り行きに任せはするが神社仏閣へ

出向いて御守り，御札をもらい，御神籤を引くに相違ない。宗教志向と成り行き志向は対極の線上にある。

アイルランドの場合は宗教と革命は結びつく。彼らはキリストを革命のための正義の御旗にする。従って，宗教と革命は近距離に収まる。前述したようにアイルランドのIRAはカトリックの武装集団であり，テロリストである。彼らはキリストによって自らの正当性を信じ，遵守し，北アイルランドをアイルランド共和国（ケルト系民族）に併合する事を頑なに遂行しようとしているのである。

表2 混乱した社会での生き方（1）尺度値の平均

	アイルランド			日 本		
	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子	全 体
1：快楽指向（ヘドニズム）	3.75	3.93	3.85	2.99	3.10	3.03
2：革命指向	3.01	2.93	2.98	2.77	2.46	2.63
3：宗教指向	2.90	3.24	3.07	2.19	2.91	2.52
4：成り行き指向	2.53	2.84	2.74	3.16	3.60	3.37
5：無関心	2.65	3.04	2.87	3.31	3.60	3.45

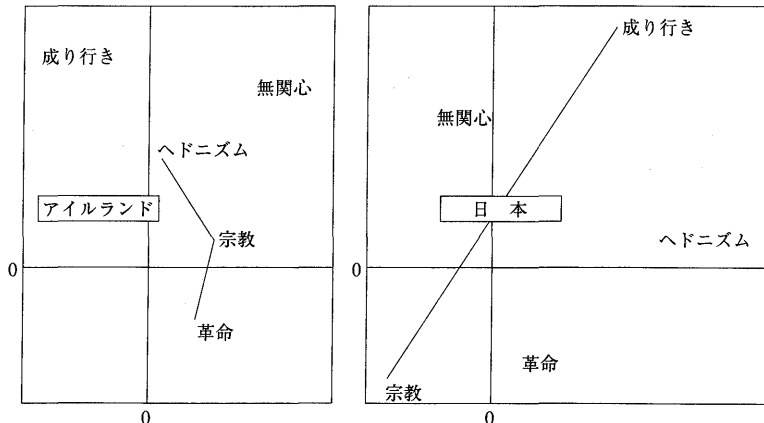
尺度値：1～2 選ばない 3 どちらでもない 4～5 選ぶ

表3 混乱した社会での生き方（2）変異係数 V

	アイルランド			日 本		
	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子	全 体
1：	33.2	34.9	34.1	43.2	47.2	45.2
2：	42.6	44.9	43.8	47.5	47.3	47.4
3：	49.2	50.3	49.8	53.6	56.2	54.9
4：	52.3	51.6	52.0	37.7	42.1	44.9
5：	52.3	55.1	49.3	38.6	41.1	39.9

$$V = (\sigma / M) 100$$

図1：生き方の空間布置図

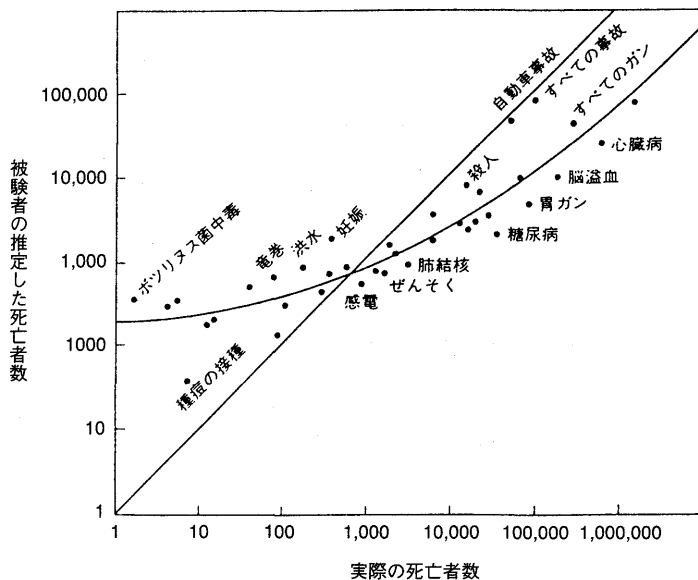


1998年の南北和平案の中に、IRAに対する軍事組織の武装解除が2年以内に行われるとする和平合意は達成されず、「真のIRA」を名乗る100人程度の軍事組織が反英武力闘争を再開すると報道し、未だにこの和平案は遂行されず、アイルランド問題は現在にいたるも未決である。

### C：社会問題に対する危機意識の構造

表4は社会問題に関する危機意識をアイルランド、日本人大学生についてその平均尺度値を示したものである。相対的に日本人大学生のほうがアイルランド人大学生よりも不安感や危機感が強い。アイルランド人の青年は麻薬犯罪、ホームレス、エイズ等の西欧諸国が抱える社会問題に対する危機感が日本人のそれよりも若干強く、それに対して日本人大学生は経済的危機、資源やエネルギーの不足、失業、新興宗教の蔓延、等に不安や危機感を覚えている。危機意識（リスク認知）はかなり心理的影響を受ける事が知られている。リスクの心理的意味は複雑で、行政政策の意思決定に大きな影響を与えるものの、その場合は住民エゴや国民感情をいかにコントロールすべきかのリスク認知や危機意識の状況を子細に分析する必要がある。危険な社会現象の生起確率について人々の認知は、実際の生起確率と異なっていることが良く知られている。リクテンスタイン等（Lichtenstein, etc, 1978）の研究によれば図2に示されているように被験者にはあらかじめ、自動車事故の年間死亡者数を目安として知らせておき、死に至る様々な病気や事故死につながる現象の死亡者数を推定させた。すると、生起確率が低い現象は過大推定され、生起確率が高い現象の確率は過小推定されることがわかった。同様に図3に示すように、スロビック（Slovic, 1987）のリスク認知の2次元空間布置図によれば、その現象が未知なるもの、恐怖を伴うものであればあるほど心理的次

図2：致死事象の死亡者数と被験者による推定値との関係（Lichtenstein et al., 1978）





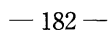


表4 社会問題に関する危機意識の比較

	アイルランド人		日 本 人	
	平 均	変異係数	平 均	変異係数
1: 日本 (IR) の経済状況	1.92	57.0	3.05	40.0
2: 資源とエネルギーの不足	1.79	55.0	2.85	42.0
3: 犯罪の増加	1.90	57.0	2.10	52.0
4: 国家債務	2.26	47.0	3.22	35.0
5: 出生率低下	2.48	46.0	3.66	31.0
6: 社会保障 (年金) の危機	2.10	55.0	2.86	43.0
7: 失業	1.97	55.0	2.46	48.0
8: 麻薬犯罪	2.41	47.0	1.97	60.0
9: 人間関係の孤立と疎遠	2.26	53.0	2.47	49.0
10: 日本 (IR) に住む外国人	3.22	38.0	3.54	36.0
11: 組織犯罪	2.16	51.0	2.21	50.0
12: 原子力発電	2.31	52.0	2.71	54.0
13: エイズ	2.17	51.0	2.05	52.0
14: 国家の国民統制	2.67	45.0	2.71	41.0
15: テロリズム	2.66	46.0	2.19	53.0
16: 亡命志願者の庇護要請	3.04	36.0	2.62	48.0
17: 右翼過激派	2.81	42.0	2.81	45.0
18: 新興宗教の蔓延	1.90	56.0	3.53	36.0
19: ホームレス	2.68	43.0	1.98	51.0
20: 遺伝子工学	2.39	50.0	2.59	49.0
21: 第三世界の人口増加	2.17	46.0	2.11	56.0
22: クローン人間	2.23	56.0	2.38	60.0
23: 臓器移植	2.59	52.0	3.67	38.0
平 均	2.35		2.68	

尺度値 1.0～2.4 危機感あり  
 2.5～3.4 どちらでもない  
 3.5～5.0 危機感なし

N: アイルランド 173 (男子= 86、女子= 87)  
 日 本 374 (男子= 203、女子= 171)

ランドには原子力発電所は一台もないが、西欧諸国に隣接している国であり、フランス、イタリア、スペイン等の諸国が原子力発電所の限界を提示し、次第に磨耗して行く発電所の修理が杜撰に管理されている場合、自国も多大な影響を被ることを知っている。しかし、彼らの21世紀への危機意識が人間関係であるとしたならば、宗教や、文化、生活習慣の違いを越えて、アイルランド全島が一つに統合される潜在的期待と不安が示されていると推察することが可能である。とすれば、極めて興味深い結果である。

図4：社会問題に対する危機意識の空間布置図～アイルランド学生

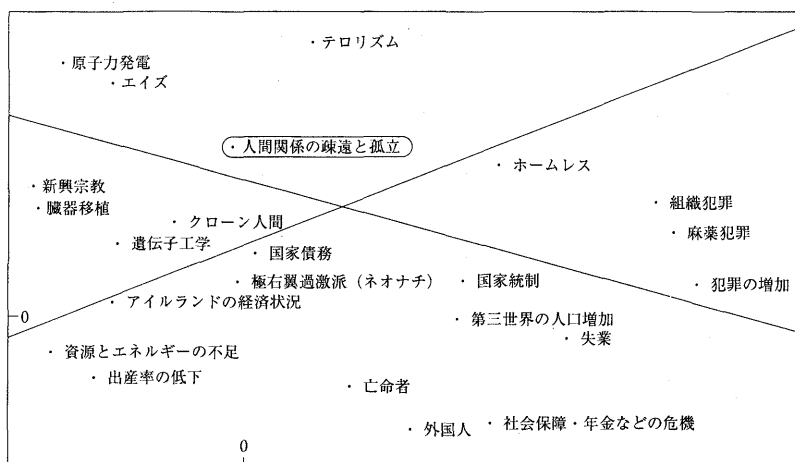
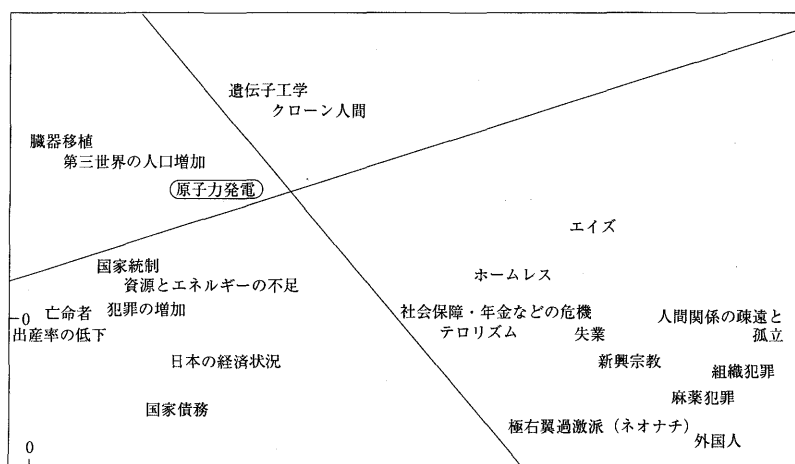


図5：社会問題に対する危機意識の空間布置図～日本人学生



## おわりに

同じ島国でありながら意識のレベルが極めて異なる日本人とアイルランド人の大学生の宗教的意識、混沌とした社会のなかでの生き方、危機意識について調査した。その歴史や社会的状況の全く異なる民族をまとめた形で同じ測度で測ろうとする事じたいが危険で無謀な試みであるとしても、両国の違いが何の様に鮮明に現れるのかを吟味する企てがあっても良いのではないだろうか。その結果、多くの見識を得る事が出来た。まず、日本では、1999年9月末、東海村で人為的ミスから生じた原子力発電所事故による放射能漏れがこれから21世紀の課題として、青年達の潜在意識に深く刻みつけられ、原子力安全委員会が急ピッチで活動を始めている。この種の問題が課題となる事は

日本国家の先行きの課題である。IT (Information Technology) 革命を推進する事を政治的スローガンにしている国家の機運とも結びつく。原子力発電所の管理は徹底され、安全度は増すが、しかし、日本の電力資源は高価な施設増設を持たなければならない程微弱、で他に電力獲得の道はないのだろうか。これが、日本における 21 世紀の課題である。

アイルランドは国家たりうるのか。島の北東部には百万人のプロテスタントが居住し、彼らはアイルランドに深く愛着をもち、北アイルランドを自分の国であり、我々こそアイルランド系であると自称する。彼らにとってアイルランド共和国（南アイルランド）は完全に異邦人であり、従って、自らをイングランド人、スコットランド人とは思わないように、南アイルランドに住むアイルランド人を自分たちと同じアイルランド人とは思っていない。この不幸な認識の様相を歴史は未解決のままに放置してきた。北アイルランドには 50 万人以上のカトリック教徒が住んでいるが、プロテスタント教徒は彼らをアイルランド国家に属しているとは思っていない。彼らはいつまでも、北アイルランドにおいては異邦人であり、虐待される対象である。IRA はこうした社会状況から生み出されたカトリック武装集団のテロリスト達である。プロテスタント原理主義者が支配する北アイルランドはカトリックが少数派であるという抑圧、さもないとカトリックによる統一アイルランドにあってプロテスタントは少数派になるという抑圧が彼らを頑なにし、相互の人間関係を拒む。統一英国 (UK) にとってどちらが国益となるかは問題ではない。当事者達がともに人間の権利を明確にし、そこから現実的な結論を引き出すような接触を持つ事が肝心なのである。彼らにとって 21 世紀の課題は両者の人間関係の疎遠と孤立からの解放であろう。

#### 参考文献

- 波多野裕造 「物語 アイルランドの歴史」中公新書 1944
- 中央大学人文科学研究所編「ケルト 生と死の変容」中央大学出版部 1996.
- Keer, D. "Mother Mary Aikenhead, the Irish Sisters of Charity and Our Lady's Hospice for the Dying,, The American Journal of Hospice & Palliative Care, Vol. 10, No. 2, 13-20, 1993.
- Lichtenstein, S., Slovic, P., Fishhoff, B., Layman, M. & Combs, B. "Judged frequency of lethal events,, Journal of Experimental Psychology : Human Learning and Memory, 4, 551-578, 1978.
- 丸山久美子 "緩和医学と臨床社会心理学。社会心理学研究 第 9 巻, 第 2 号, 123-130, 1994.
- 丸山久美子 "20 世紀末現在の日本社会の光と影。聖学院大学論叢 第 7 巻, 第 2 号, 1994.
- 丸山久美子 "自然的・人為的社会不安に関する青年の危機意識を探る一日独青年の社会問題に対する不安感の比較研究一。聖学院大学論叢 第 9 巻, 第 1 号, 101-118, 1996.
- 丸山久美子・ヘンドリック・ビベラー "日独大学生の「生と死」への態度に関する比較研究。聖学院大学論叢 第 8 巻, 第 2 号, 191-222, 1996.
- Maruyama, K. "Social anxiety and consciousness of global crisis in modern youth,, The Journal of Seigakuin University, Vol. 5, 129-147, 1992.
- Maruyama, K. "Vorstudie zur struktur globalen Krisenbewusstseins und gesellschaft licher Angst bei der gegenwärtigen, japanischen Jugend,, Behaviormetrika, Vol. 21, No. 1, 19-47, 1994.
- Maruyama, K. & H. Biebler "Japanische und deutsche Studenten: Religiöse und politische Mentalitäten im

- Vergleich,, Z-A Information (Universität in der Kölen), Vol. 37, 51-63, 1995.
- Maruyama, K. & H. Biebler "Comparative study of social unrests in global social unrest and crisis among modern Japanese and German University students., Behaviormetrika, Vol. 25, No. 2, 81-94, 1998.
- Maruyama, K. "A comparative study of the religious pluralism and political attitudes in modern youth,, International medical Journal, Vol. 4, No. 2, 135-141, 1997.
- Slovic, P. "Perception of risk,, Science, 236, 280-285, 1987.
- 鈴木 良平 『IRA—アイルランドのナショナリズム—』(第四版 彩流社 1998)
- 渡部 昇一 『アングロサクソンと日本人』新潮選書 1987.

注

メアリー・アイケンヘッド (Mary Aikenhead) は1787年1月19日、アイルランドのコークで生まれた。父はプロテスタントの物理学者、母はカトリックの商人の娘であった。この結婚はかなり危険な要素を孕んでいた。というのはプロテスタントとカソリックの結婚は許されなかったからである。習慣によってメアリーは父の宗教であるプロテスタントでバプテストを受けたが、1802年にダブリンの司祭であった Father Daniel Murray の導きでカトリックに改宗し、25才の時にシスター・メアリー・アウグスチン (Sister Mary Augustine) となった。その後、たった2名のシスターがダブリンで貧しい者、虐げられたもののための慈善病院を設立したが、それは1816年設立の「The Irish of Charity」として知られている。ダブリンにはところどころにアイルランドの聖人である St. Brigid にちなんだ見習い修道女の寮がある (St. Brigid's Novitiate)。ターミナル・ケアはシスター達の使命であった。マザー・メアリーはその後 St. Vincent' Hospital に移ったが、その病院に死に行く人々へのホスピス病棟を作ることが念願であり、単に病人への癒しのみならず、彼等が平和と平安のなかで満たされて死に行く場所を渴望した。マザー・メアリーは1845年に、「Our Lady's Hospice (聖母マリアの病院)」をダブリンの郊外に設立。そのモットーは「Caritas Christi urget nos (The Love of Christ drives us)」で、彼女たちは貧しい家々を歩き、癒しとわずかの施しを与えた。マザー・メアリーは1858年7月22日、病を得て、71才の生涯を閉じた。マザー・メアリーの精神は末期患者のための癒しである。「Our Lady's Hospice for dying」がホスピスの先駆けであった。マザー・メアリーの志は死後他国のホスピス病院へと受け継がれた。

それらは以下のようにオーストラリアのシドニーに始まり、ロンドン、ニューヨークと引き継がれて行く。ダブリンからシドニーを経て、シシリー・サンダースで有名なセント・クリストファー・ホスピスにいたる足跡を以下に示す。

The Sacred Heart Hospice for the dying in Sydney, Australia, 1890

St. Joseph's Hospice for the Dying in London, England, 1905

Caritas Christi Hospice for the dying poor in Kew, Australia, 1938

St. Joseph's Hospice for the dying in Lismore, Australia, 1930

St. Margaret's Hopice for the dying in Glasgow, Scotland, 1957

Assumption House in Airdrie, Scotland, 1957

The Mount Olivet Hospice in Brisbane, Australia, 1957

Marymount Hospice in Cork, Ireland, 1984

Cicely Saunders, St. Christopher's Hospice, London, 1967 (She was as physician at London's St. Joseph's Hospice from 1958-1965)